

第1章

台湾社会分析の現状と課題 ——社会階層とエスニシティを中心に——

沼崎 一郎

要約： 「台湾総合研究Ⅲ 社会の求心力と遠心力」研究会では、1年間の討論を通して、全体に関わる問題として、台湾社会の統合性と、求心力と遠心力という表現の多義性とが明らかとなった。本稿では、先ずこの2点について、論点を整理する。求心力と遠心力については、みつつのモデルおよびその複合モデルを提示する。次に、筆者の担当する社会階層とエスニシティの領域における知見と課題とを概観する。特に重要な点は社会階層、エスニシティともに複雑化していること、そのため多面的な理解が求められていることである。

キーワード： 台湾社会，社会階層，エスニシティ

はじめに

本研究会の目的は、社会の有する求心力と遠心力という視点から、現代台湾社会の諸相を明らかにすることである。今年度の研究会での討論を通して、全体に関わる問題として、台湾社会の統合性と、求心力と遠心力という表現の多義性とが明らかとなった。本報告では、先ずこの2点について、論点を整理する。次に、筆者の担当する社会階層とエスニシティの領域における知見と課題とを概観する。

第1節 台湾社会とは何か

そもそも台湾社会と呼びうる社会は存在するのか？台湾社会の存在は、自明のように思われる。台湾および周辺諸島に居住人々が存在し、彼らの間には間違いなく相互関係が結びつかれ、少なくとも現在は、彼らが選挙して構成した政府が、彼らと台湾地域を実効支配している。

しかしながら、それだけで台湾社会が存在すると断言してよいのかどうか。そのように改めて問う理由は、過去において、深刻な亀裂が存在し、社会が分断されていた

からである。

一例を挙げるなら、漢族居住地域と原住民居住地域との亀裂がある。清朝時代においては、文化的に漢化していない原住民は「生蕃」と呼ばれ、その居住地域は清朝支配の及ばない「化外之地」であった。とするならば、台湾島は、漢族社会と原住民社会とに二分され、二つの社会の間には種々の交流と交渉はあるものの、相対的に独立した二つの社会が併存していたと見ることもできる。つまり、台湾島全体を包括する一つの社会は、未だ成立していなかった可能性が高い。そして、この状態は、日本統治時代においても持続していたし、国民党政権下においてさえも継続した。現在は、この亀裂は完全に解消されたと言えるであろうか。

それだけではない。漢族社会自体も、有機的な統合体を構成していたとは必ずしも言えない状況が長く続いた。清朝時代には、泉州や漳州といった出身地の違い、閩南語と客家語といった言語の違いによって、漢族社会内部にも亀裂が存在し、分類械闘と呼ばれる武力抗争が頻発した。清朝時代の漢族社会は、出身地や言語ごとに分断された小規模社会の集合体に過ぎなかったと看做すこともできるのである。日本統治時代に入って、これら小規模社会は、いわば上から強権的に統合されたわけだが、それでも農民の多くは、せいぜい近隣のマーケット・タウンにでかけることはあっても、人生の大部分を狭い村落社会の内部で送っており、その生活世界の地平は非常に限定的であって、台湾大の広がりを持つものではなかった。そういう意味では、台湾社会は、小規模社会の集合体に止まっていたと言えなくもない。

国民党と蒋介石政権の台湾移転に伴って、後に「省籍矛盾」と呼ばれる新たな亀裂が漢族社会に生じた。日本統治時代以前から台湾に居住し、閩南語と客家語を母語とする「本省人」と、日本の降伏以後に大陸から移住し、閩南語も客家語も解しない「外省人」とは、政治的・経済的立場が異なるのみならず、コミュニケーションも不可能な状態で、相互に隔離されていた。この分断状況は、1947年の2.21事件によって決定的となり、その後も長く解消されることはなかった。

こうした歴史的状況を考慮すると、台湾は、清朝時代から国民党政権下に至るまで長期にわたって、有機的な統一体としての社会を構成していたとは言えないのではないかという疑念が生じる。

それでは、台湾は、現在でも、有機的統一体としての社会を構成していないのであろうか？ それとも、現在では、有機的統一体としての社会を構成しているのであろうか？ 後者であるとする、そのように認識しうる根拠は何であろうか？ また、いつ、どのようにして、台湾は有機的統一体としての社会を構成するに至ったのであろうか？ この問いに一定の解答を与えることが、次年度の研究会の課題となる。

かつて私は、「新しい台湾意識」の出現に注目し、1990年代の民主化以降、台湾が多元性を保ちつつ、初めて有機的に統一された社会の形成へと歩みだしつつあるので

はないかと論じた (Numazaki [1999], 沼崎[2002])。私の予想が正しいのかどうか、次年度を通して検証したい。

第2節 求心力と遠心力——3つのモデル

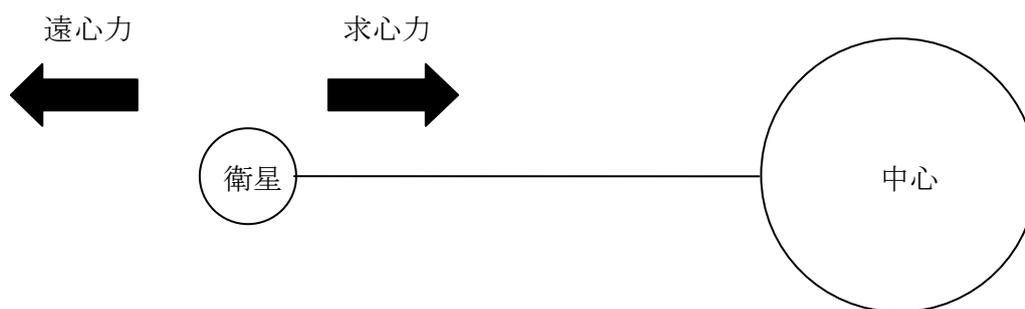
本研究会では、求心力と遠心力というキーワードを用いて、台湾社会の諸相を捉えようとしている。しかしながら、今年度の議論を通して、このキーワードの意味内容について、一致した認識が共有されているとは必ずしも言えないことが明らかとなった。

しかしながら、おおよその共通理解は存在し、それは3つのモデルに整理できるのではないと思われる。

1. 接近・離脱モデル

第一は、太陽系の惑星システムのようなモデルである (図1)。このモデルでは、求心力とは、惑星を太陽に接近させようとする力であり、遠心力とは、惑星を太陽系システムから離脱させようとする力である。求心力と遠心力が均衡していれば、惑星は周回軌道上に留まる。しかし、求心力が強ければ、惑星は太陽に引き寄せられるし、遠心力が強ければ、惑星は太陽系を離れて飛び去ってしまう。

図1 接近・離脱モデル



(出所) 筆者作成。

このモデルは、たとえば台湾人留学生の問題に当てはめることが可能であろう。蒋介石政権下では、台湾大学の卒業生の半数が海外に留学するという状況があった。しかも、その9割が台湾に帰ることなく、そのまま海外で職を得ていた。このような頭脳流出は、台湾社会に遠心力が働いていると考えることができるだろう。その後、台湾経済の成長と政治的民主化の進展に伴って、就職のために台湾に帰還する学生が増えている。これは、台湾社会の求心力が増したことを意味する。

このモデルは、労働者の国際移動や移民の動向にも当てはめることができるだろう。労働者が台湾から流出するか、それとも台湾に流入するか。台湾から移民が流出するのか、それとも台湾に流入するのか。しかし、単に流入と流出のバランスだけで、求心力が強いか遠心力が強いかは判断できないかもしれない。台湾人の流出が増大するのであれば、外国人労働者や外国人移民の流入の多寡にかかわらず、台湾社会には遠心力が強くと働いていると考えるべきかもしれない。しかし、外国人労働者や移民の流入が多ければ、台湾人の動向にかかわらず、台湾社会には求心力があると看做しうるとも言える。

このモデルにおいて、もうひとつ重要な問題は、中心は何かということである。太陽系システムであれば、圧倒的質量を持つ恒星である太陽が、その中心として存在する。そのような中心的存在が、台湾社会にあるだろうか？

蒋介石政権時代は、求心力を発揮したか遠心力を発揮したかはともかく、国民党は台湾社会の中心的存在であったろう。あるいは、1980年代にはエレクトロニクス産業が中心的な存在だったかもしれない。シリコンバレーから多くの台湾人科学者・技術者を引きつけたとすれば、多大の求心力を発揮したと看做すこともできる。

一方、中心が存在しない場合も考えられる。外国人配偶者の増加は、台湾社会が求心力を発揮した一例かもしれないが、その婚入先は、農村や都市に分散しており、特定の地域に集中しているわけでもない。求心力の中心を同定することは困難である。しかし、このような場合に、果たして求心力という表現を使っていいものかどうか、検討が必要であろう。

2. 引力・斥力モデル

第二は、無数の磁石の集合体とでも言うべきモデルである(図2)。磁石にはN極とS極があり、異なる極同士は引き合うが、同じ極同士は反発する。相対する極の組み合わせによって、引力が働いたり、斥力が働いたりするわけである。

このモデルを台湾に当てはめると、たとえば「省籍矛盾」の場合には、外省人と本省人の間には、長らく斥力が働いていたことになる。しかしながら、近年では外省人の「台湾化」を指摘する研究もあり、斥力は弱まっている可能性がある。省籍を超えた通婚の増加は、引力の発生を示唆するものかもしれない。あるいは、本省人内での福佬と客家の差異化、政府公認の原住民部族の増加などは、諸集団の間の斥力の増加を物語るものかもしれない。

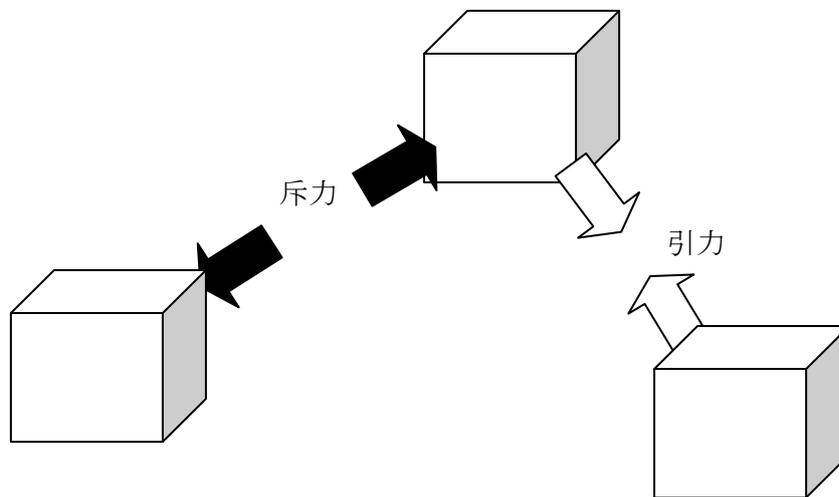
これを一般化するならば、社会を構成する諸集団・諸要素の間に引力が働くならば、社会全体の凝集力が高まり、逆に斥力が働くならば、社会全体の凝集力は弱まり、最悪の場合には分裂、解体に至るということになる。そうすると、このモデルにおいては、求心力とは社会的凝集させる力を意味し、遠心力とは社会を解体の方向へと向

かわせる力を意味すると言える。

このモデルの特徴は、先の接近・離脱モデルとは異なり、必ずしも中心的な存在をそうていする必要がないことである。比較的勢力の均衡した諸集団が、自律性を保ちながら、適度な距離で結合しつつ、社会全体としては凝集力を維持するといった状況があれば、このモデルを当てはめることができるだろう。

近年の台湾では、「多元文化」論が人口に膾炙しているが、これなどは、引力・斥力モデルの一例と考えることができるのではなかろうか。

図2 引力・斥力モデル

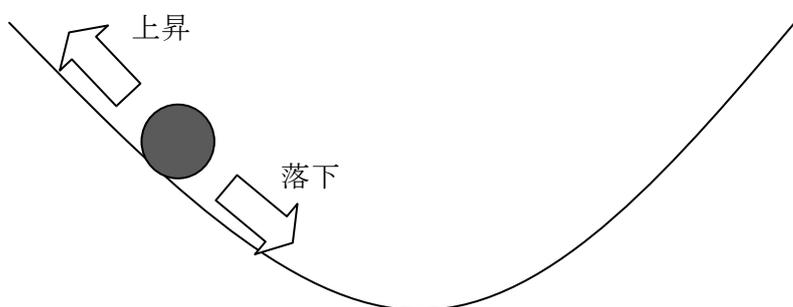


(出所) 筆者作成。

3. 落下・上昇モデル

第三は、丸い窪みにボールを入れた場合のようなモデルである(図3)。放っておけば、ボールは自然に落下して底に落ち着く。ボールに何らかの力が働けば、上昇して窪みを飛び出す。第一の接近・離脱モデルとの違いは、底を中心とは考えないことである。ボールが積極的に中心に接近しようとしているのではなく、自然と落下して底で動かなくなるというイメージだ。したがって、このモデルにおける求心力とは、自然に落下させる力となる。つまり、安定を志向させる力となる。遠心力とは、ボールを上昇させ、窪みの外へと押し出す力であり、海外雄飛を夢見て留学するとか、工場を海外に移転してグローバル化に対応するといった行動を取る台湾人に働く力のことになる。

図3 落下・上昇モデル



(出所) 筆者作成。

具体的には、近年のジャーナリズムが取り上げるような、安定志向の台湾人に、このモデルが当てはまるのではないかと考えている。かつての高度経済成長時代の「老板」(沼崎[1996], Numazaki [1997])のように、企業家精神に富み、ハイリスク・ハイリターン志向で、積極的に経済的・社会的上昇を目指すことがなく、ほどほどの収入と地位に満足し、ワークライフバランスを重視して、LOHAS的な生活に価値を置く、新しいタイプの台湾人である。彼らは、台湾に対して強い愛着があるわけではないが、台湾の現状を肯定し、台湾に留まることが自然だと考える。比較的経済的に恵まれた階層にあり、相対的に若い世代に、こうした安定志向が強いように見受けられる。ポスト民主化世代と言ってもよい。

このように見た場合、近年になって初めて、このモデルが当てはまるような台湾人が出現したのではないかという仮説が成立する。この仮説の検証が、次年度の課題となろう。

4. 複合モデル

以上3つのモデルは、必ずしも相互に排他的なものではない。時代によって、テーマによって、適用可能性が変わってくることもあるだろう。しかしながら、一年間の議論を通して、参加者の多くが、意識的・無意識的を問わず、だいたいこの3つのモデルのどれか、またはいくつかの組み合わせで、台湾社会の求心力・遠心力を論じていたように見受けられる。次年度の課題は、参加者それぞれの用いるモデルを明確化し、研究会全体としての共通理解のもとに、個々の研究テーマに取り組むことだろう。

第3節 社会階層とエスニシティ——古い二元論から新しい多元論へ

1990年代半ばの時点で、私は台湾の社会階層とエスニシティについて、台湾化と中

流化が進むと展望していた（沼崎[1998]）。その証左として、中央研究院による1991年の台湾地区社会意向調査のデータを引用している（表1、表2）。表1は、外省人と本省人との間で言語の壁が薄く低くなっていることを示しており、表2は、全体として中流意識が浸透していることを示しているというのが、私の解釈だった。もちろん、台湾化の流れが一様ではないこと、中流化の流れから取りこぼされる人々がいることを指摘して、「不確実」な台湾化、「不安定」な中流化と但し書きを付けている。しかし、私の論調は、そうした不確実性と不安定性は減少するだろうというものだったことは否めない。

しかしながら、私の予想はどうやらはずれたようである。台湾化は相変わらず不確実であり、むしろ新しい分化が進んでいる可能性があり、さらに新しい異質な要素が台湾に入り込んできている。中流化にも疑問符が付く。相対的に豊かになったのは確かであるが、経済成長の鈍化とともに、格差が増大しているという懸念が増している。次年度の研究課題は、社会階層の複雑化とエスニシティの複雑化となるだろう。

表1 エスニシティ別に見た階層意識

単位：％

	福建人	客家人	外省人	合計
上層	0.7	1.9	1.6	0.8
中の上	9.0	11.1	18.5	9.6
中層	51.1	46.3	53.2	48.8
中の下	12.2	15.7	8.9	11.6
労働者	19.7	16.7	8.9	17.7
下層	7.4	8.3	8.9	7.3
合計	100.0 (N=1160)	100.0 (N=108)	100.0 (N=124)	100.0 (N=1392)

（出所）林忠正・林鶴玲[1993: 119]。

（注）中央研究院「臺灣地區社會意向調査」1991年度第二次定期調査。

表2 省籍別・世代別に見た言語使用意識

単位：％

世 代	国 語					
	本省籍		外省籍		合 計	
	流暢に 話せる	積極的に 話したい	流暢に 話せる	積極的に 話したい	流暢に 話せる	積極的に 話したい
20－29	77.4	35.0	92.7	75.6	79.4	40.3
30－39	53.9	37.1	88.3	83.3	57.4	41.8
40－49	42.7	26.3	83.9	83.9	46.1	31.1
50－59	21.5	10.5	81.8	72.7	25.1	14.2
60－64	13.1	7.1	68.2	59.1	24.5	17.9
合 計	49.3	20.9	85.5	77.6	53.1	34.1

世 代	福 叻 話					
	本省籍		外省籍		合 計	
	流暢に 話せる	積極的に 話したい	流暢に 話せる	積極的に 話したい	流暢に 話せる	積極的に 話したい
20－29	82.5	88.7	39.0	39.0	76.8	82.2
30－39	91.5	95.8	71.7	41.7	89.5	90.3
40－49	89.2	97.7	51.6	25.8	86.1	91.7
50－59	83.7	97.7	63.6	27.3	82.5	93.4
60－64	83.2	100.0	18.2	27.3	69.8	84.9
合 計	87.7	95.5	52.1	35.2	84.0	89.0

(出所) 王甫昌[1993: 89, 92]。

(注) 中央研究院「臺灣地區社會意向調査」1991年度第二次定期調査。

1. 社会階層の複雑化？

表1に示すように、1990年代初頭の段階では、エスニシティの違いにかかわらず、台湾人の過半数またはそれに近い数が「中流」意識を持つに至った。

1980年代の経済発展をめぐる論調は、日本を筆頭に東アジアの四小龍は高度成長と平等化を同時に達成したというものだったが、表1、図4に示すデータは、それを裏

付けるもののように見えた。

しかしながら、図4を注意深く見ると、2000年代に入って若干の変化が観測される。格差拡大が始まったと言えるかどうかは分からないが、少なくとも平等化の流れに歯止めがかかった様子が伺える。資産については、どのような傾向が見られるのだろうか。たとえば、持家比率は増加しているのだろうか、それとも減少しているのだろうか。より詳しい数値の検討が必要となろう。

全体的な傾向を概観すると、台湾全体の富裕化と大衆消費社会化が進み、居住用の住宅に加えて別荘を所有する中産階層も出現する一方で、都市部の地価高騰のために住宅を取得できず、借家住まいを余儀なくされる人々が現れるなど、中産階層内部の新たな格差が生じた。中流化から取り残されている人々がいる。外省人の退役軍人たちは、相対的に生活水準も低く、本省人の中流階層からは「下」に見られている。先住民族の多くも、均しく経済発展の恩恵にあずかっているとは言えない。山間部の村は過疎化し、都市に出た先住民族は労働者階層の底辺に組み込まれている。

さらに、近年急速に進行するグローバル化が、台湾の社会階層に大きな影響を与え、新しい不平等を生み出している。台湾経済のグローバル化は、2つの側面で進行している。1つは、台湾企業の海外流出である。もう1つは、外国人労働者の流入である。

独立自営の「老板」といえども、輸出市場の消長や世界的な景気変動の影響に常に晒され、海外に工場を移転するなど多国籍化で対応するものと、そうでないものとの格差が生じ始めている。

時を同じくして、低賃金の外国人労働者が、主に東南アジアから台湾に流入し始めた(表3)。外国人労働者の総数は、1991年には3000人に満たなかったが、1995年には20万人に迫り、2000年には30万人を超えた。2000年代には、ほぼ30万人の外国人労働者が台湾で働いている。

注目すべきは、外国人労働者たちは、単に所得の上で最底辺に位置づけられるだけではないという点である。言語が不自由で、台湾の漢民族文化にも馴染みが薄いため、文化的にも困難な生活を余儀なくされている。そのうえ、彼らの多くが、台湾人の偏見と差別に晒されていると感じている。最下層の労働者階層にあっては、経済的にも文化的にも疎外された外国人が増えているわけである。

経済のグローバル化は、台湾社会の内部に新しい文化的不平等を生み出している可能性が高い。この点を、次年度はさらに深く検討したい。

2. エスニシティの複雑化?

台湾におけるエスニシティの構造は、近年に入って益々多元化しているように見える。台湾内部の既存の諸集団の多元化に加えて、外部から新たな要素が流入し、その構造は複雑化しているようである。

表3 外国人労働者の増加

	総計	インドネシア	マレーシア	フィリピン	タイ	ベトナム	モンゴル
1991	2,999	-	-	-	-	-	-
1992	15,924	-	-	-	-	-	-
1993	97,565	-	-	-	-	-	-
1994	151,989	6,020	2,344	38,473	105,152	-	-
1995	189,051	5,430	2,071	54,647	126,903	-	-
1996	236,555	10,206	1,489	83,630	141,230	-	-
1997	248,396	14,648	736	100,295	132,717	-	-
1998	270,620	22,050	940	114,255	133,367	-	-
1999	294,967	41,224	158	113,928	139,526	131	-
2000	326,515	77,830	113	98,161	142,665	7,746	-
2001	304,605	91,132	46	72,779	127,732	12,916	-
2002	303,684	93,212	35	69,426	115,538	29,473	-
2003	300,150	56,437	27	81,355	104,728	57,603	-
2004	314,034	27,281	22	91,150	105,281	90,241	59
2005	327,396	49,094	13	95,703	98,322	84,185	79
2006	338,755	85,223	12	90,054	92,894	70,536	36

(出所) 行政院勞工委員會(<http://statdb.cla.gov.tw/>)。

(1) 古い二元性の解消

1990年代以前の台湾では、エスニシティは常に二元的な構造を有していた。それは、重層的に構造化されていたが、同一レベルにあっては二元性を保持していた。

清朝時代であれば、「漢人」対「蕃人」という二元性が基本であった。「漢人」は、さらに「福佬」対「客家」に、「福佬」は「泉州」対「漳州」に下位区分されたが、二元的な対立構造は保持されている。それは「蕃人」も同様で、漢化した「熟蕃」対漢化していない「生蕃」に二分されていた。

日本統治時代になると、「内地人」(日本人)対「本島人」という二元性が基本となる。そして、国民党政権下では、大陸からの新移民である「外省人」が日本人と入れ替わって、「本省人」と呼ばれるようになった「本島人」と二元的に対立した。

日本時代から国民党政権下における先住民族の位置づけは、一言で言えば外化である。漢化された「熟蕃」は、「本島人」あるいは「本省人」に包摂されていたように思われる。一方、漢化されていなかった「生蕃」は日本時代には「高砂族」として一括され、漢人とは異なる統治システムの下に置かれた。国民党政権も、「高山族」と呼称

を変えた以外は、日本式の分離統治システムを当初は維持した。これはつまり、台湾島そのものが、漢人地域と先住民族地域に二分されていたことを意味する。日本時代も国民党政権時代も、清朝以来の「漢人」対「蕃人」という二元性が継承されていたということになる。

こうした二元的な対立構造が、1980年代から1990年代にかけて、次第に崩れてくる。1980年代に入ると、「本省人」李登輝が国民党副総統に就任、党外と呼ばれる野党の存在も許容された。1988年、蔣経国の死後、李登輝が総統に昇格すると、政治の民主化は一挙に加速する。1989年には民主進歩党が正式に成立し、特に台湾南部を中心に「本省人」の間に支持を広げ始めた。そして、2000年には、民主進歩党の陳水扁候補が総統選挙に当選、政権交代が実現した。

このような政治の民主化の背景には、「本省人」対「外省人」という対立が溶解してきたという事情がある。徐々にではあるが、本省人と外省人との間の通婚も増加した。また、両者の間の言語の壁も低下した（表4）。国語の話せる本省人は着実に増加し、国語を積極的に話したいという本省人も若い世代ほど多い。同様に、閩南語を話せる外省人も多く、若い世代ほど閩南語を話すことに抵抗がない。注目すべきは、どちらか一方が他方に同化することなく、どちらも二言語使用に習熟し始めているという点である。エスニシティの違いが解消され始めたわけではないが、エスニシティの境界が越えやすくなってきたのである。

表4 国際結婚の増加

	結婚件数	非台湾籍配偶者との結婚登録数		非台湾籍配偶者との結婚登録件数が全体に占める割合
		外国籍	中国大陸・香港・マカオ	
1998	140,010	10,454	12,451	16.36%
1999	175,905	14,674	17,589	18.34%
2000	183,028	21,338	23,628	24.57%
2001	167,157	19,405	26,797	27.64%
2002	173,343	20,107	28,906	28.28%
2003	173,065	19,643	34,991	31.57%
2004	129,274	20,338	10,972	24.22%
2005	142,082	13,808	14,619	20.01%
2006	142,799	9,524	14,406	16.76%

(出所) 主計處[2007: 46-47]。

(2) 新しい多元性の表出

しかしながら、自体は私の予想通りには進まなかったようである。エスニックな分化は多元化し、王甫昌[2003]は「台湾四大族群」論を展開した。王甫昌[2003:57]の図を見ると、原住民、客家人、閩南人、外省人という四大族群は、従来の二元的な対立構造の組み合わせに由来していることが分る。しかしながら、重要なことは、この四集団が、現在では同一平面上で相互作用を持つようになったということであろう。たとえば、原住民との対立あるいは交渉において、客家人、閩南人、外省人とをまとめて「漢人」と捉えてはいけないのである。そこには、四者四様の複雑な絡み合いがあるからである。王甫昌は、少なくとも四元的に見なければ、現代台湾のエスニック状況は理解できないと主張しているわけである。

加えて、既に述べたように、東南アジアからの外国人労働者の流入がある。それは、建設労働などに従事する男性労働者に限らず、家事労働を担う女性労働者をも含む。生産と再生産の両面において、エスニシティの多元性は増大しているのである。

さらに重要なのは、家族のグローバル化とも呼ぶべき現象の出現である。主に下層の家族を中心として、「嫁不足」が深刻化している。特に、農村でその傾向が強い。そのため、外国人花嫁が近年急増しているのである（表4）。一時は、4組に1組の結婚が「国際結婚」だと言われている。結婚の登記数を見ると、非台湾籍の花嫁は、1998年に約2万3千人、2003年には約5万4千人に達した。2001年以来、母親が非台湾籍の新生児数は毎年3万人前後である。こうして、農村を中心に、家族の内部の国際化が進行しているのである。

外国人妻の多くは、外国人労働者と同様、言語が不自由で、台湾の漢民族文化に馴染みが薄い場合が多い（施ほか[2007b]）。中国大陸や香港出身の花嫁は、「同じ中国人」ではあるが、日本の植民地時代から国民党政権時代にかけて約100年間にわたって中国大陸や香港とは異なる歴史を歩んできた台湾の生活は、彼女たちにとっては文字通り異文化である。夫の両親が「本省人」であれば、閩南語で会話しなければならないことも多い。農村の日常生活も閩南語が中心だ。言語的にも、外国人花嫁は疎外されがちなのである。

さらに、母親が外国人の場合、子どもの教育に深刻な影響が出ることがある（施ほか[2007a]）。国語のできない母親であれば、学校から渡されるプリントさえ読めないこともあるし、子どもの勉強を十分見てやれない可能性が出る。多国籍家族に生まれた子どもは、教育上のハンディキャップを背負う可能性が高いのである。

経済のグローバル化と同様に、家族のグローバル化も新しい文化的不平等を生み出している可能性がある。

家族内の多文化化がもたらすエスニシティの複雑性が、台湾社会にどのような影響を与えようとしているのか、その全容を現段階で捉えるのは不可能だが、注意深く分

析する必要がある。

おわりに

以上の概観を踏まえて、社会階層とエスニシティという視点から、台湾社会の求心力と遠心力を考察した場合、次年度に向けてどのような課題が提示できるだろうか。

第一に、接近・離脱モデルを当てはめると、外国人労働者・外国人花嫁に対しては、求心力が働いていると言えそうである。それがどの程度のものなのか、またどれくらい持続的なものなのかが、研究課題となる。一方、「老板」など中小企業経営者に対しては、遠心力が働いている可能性がある。その実態はどのようなものなのか、経済的なグローバル化については既に多くの分析がなされているが、その社会的影響の分析は手つかずの状態である。社会階層の多元化・複雑化という視点から、社会経済的に中層あるいは上層に位置する企業経営者の動向を分析してみたい。

第二に、引力・斥力モデルを当てはめると、多元化する社会階層間、多元化するエスニック集団間に働いているのが、引力なのか、それとも斥力なのか、全体として、台湾社会は凝集する方向へ向かっているのか、それとも解体の方向へ向かっているのか、その現状を明らかにすることが課題となる。

第三に、落下・上昇モデルを当てはめると、新しい安定志向の台湾人がどの程度存在し、またどのような市民的・政治的行動を見せているのか、その実態を明らかにするとともに、それが台湾社会の凝集性にどのような影響を与えているかを分析する必要がある。

以上、三点の課題を発見したことが、本年度の成果である。

【参考文献】

(日本語)

施昭雄・陳俊良・許詩屏・桂田愛[2007a]「中国大陸及び東南アジアの外国籍配偶者移民の背景から考察する「新台湾之子」の教育問題とその対策」(『福岡大学研究論集 A』6(6) 2月 121-138 ページ)。

施昭雄・陳俊良・許詩屏・桂田愛[2007b]「台湾における外国籍及び中国大陸籍配偶者の現状と展望」(『福岡大学研究論集 A』6(6) 2月 139-154 ページ)。

沼崎一郎[1996]「台湾における「老板」的企業発展」(服部民夫・佐藤幸人編『韓国・台湾の発展メカニズム』アジア経済研究所 295-318 ページ)。

沼崎一郎[1998]「エスニシティと社会階層」(若林正丈編『もっと知りたい台湾 第

2版』弘文堂 46-68 ページ)。

沼崎一郎[2002]「現実の共同体，架空の政体——台湾社会の変容と「新しい台湾意識」の出現」(『東北人類学論壇』(1) 3月 19-29 ページ)。

(中国語)

林忠正・林鶴玲[1993]「臺灣地區各族羣的經濟差異」(張茂桂他『族群關係與國家認同』台北 業強出版社)。

王甫昌[1993]「省籍融合の本質」(張茂桂他『族群關係與國家認同』台北 業強出版社)。

——[2003]『當代台灣的族群想像』台北 群學出版有限公司。

主計處(行政院)[2007]『2006 社會指標統計年報』主計處。

(英語)

Numazaki, Ichiro [1997] “The Laoban-Led Development of Business Enterprises in Taiwan: An Analysis of Chinese Entrepreneurship,” *Developing Economies*, 35 (4), pp.440-457.

Numazaki, Ichiro [1999] “The Real Community under Imagined States: The Social-Economic Transformation and the Rise of the New Taiwan Consciousness in Contemporary Taiwan,” in Huang Shu-min and Hsu Cheng-kuang eds., *Imagining China: Regional Division and National Unity*, Taipei: Institute of Ethnology, Academia Sinica, pp.253-264.